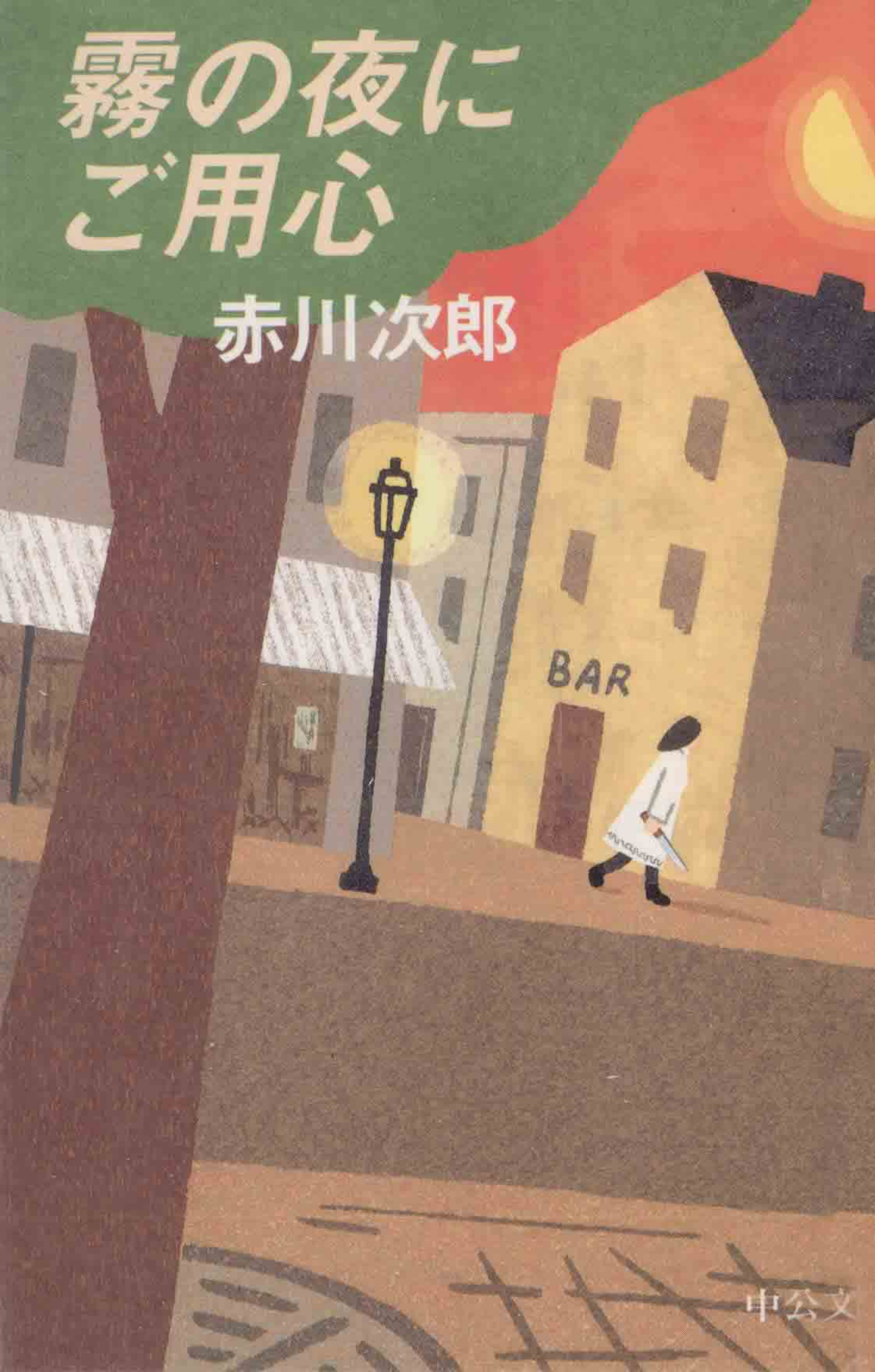


霧の夜に ご用心

赤川次郎



中公文



中公文庫

霧の夜にご用心

1995年 4月3日印刷

1995年 4月18日発行

著 者 赤川次郎

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34 TEL 03-3563-1431(販売部)

©1995 CHUOKORON-SHA,INC. / Jiro Akagawa

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202301-7

Printed in Japan

中公文庫

霧の夜にご用心

赤川次郎

中央公論社

目次

切り裂きジャック

最初の犯行

手配

電話の声

一美の秘密

第二の凶行

寂しい逃亡者

新入社員の歓迎会

嫉妬する電話

再び、霧の夜に

126 110 97 84 70 57 45 33 22 9

霧の中の追跡

消えた女たち

尋問

復讐の刃

松尾の死

三人の女

ついて来る女

忍び寄る刃

二度光る刃

美しい一夜

ある看護婦からの電話

消えた看護婦

迫る眼

273 259 245 230 218 209 198 187 177 168 160 147 136

宣告

回想

霧の中の対決

追い詰められて

エピソード

解説

久美紗織

341

334 323 310 298 281

霧の夜にご用心

切り裂きジャック

結局、霧が問題なのだった。

他の条件は総て整っている。といって大した準備がいるわけではないが。

ともかく、私の手には切れ味鋭いナイフがあり、黒づくめの衣裳も揃っている。もちろん、吸血鬼ドラキュラが映画でまとっているような黒いマントなど着て歩いたら、現代では目立って仕方がないし、サンドイッチマンぐらいに見られるのがオチだろう。そこは現代にふさわしく、黒のソフト帽、黒のコート、黒の靴——これは足音がよく響くようなものを選んだ——そして黒の革手袋……。

靴については、普通の犯罪者なら、できるだけ足音のしない、ゴム底か何かの靴にするのだろうが、夜の街路に響く、コツ、コツ、という靴音は、殺人者にとっては欠かせないものである。

後、必要なのは被害者だが、これは別に誰でもいい。いや、誰でもいいっても、女で、

若くて、男を相手にする商売をしていればいいわけだ。

これで「美人」という条件をつけると、とたんに見付けするのが難しくなるので、それにはこだわらない。だから、被害者はその手の場所に行けば、いくらでも見付かる。後は実行あるのみ、というわけだが……。残る一つが問題で、つまり私は霧にこだわっていたのである。

霧の夜の殺人。——これこそが私の求める「理想的な殺人」なのだ。

濃霧ににじむガス灯の光、ぼんやりと浮かび上がる灰色の家並、ガラガラと敷石をかみながら走って行く四輪馬車。パトロールする警官の姿、すれ違って行く、ふんわりと広がったスカート姿の女性……。

女の悲鳴はこういう夜にふさわしいし、殺人鬼には、これこそ最上の舞台装置である。しかし、今は二十世紀である（梨の話ではない）。ガス灯や馬車、裾の広がったスカートなどは諦めざるを得ないだろう。

重々しい石造りの家々とか、敷石の舗道というのも、ロンドンやウィーン辺りへ遠征すれば、見付かるかもしれないが、私はそんな金持ではない。

従って、ごく平凡な盛り場とか、チマチマとした建売住宅に、穴だらけのアスファルトの道路で我慢する他はない。

これだけ譲っているのだから、私がせめて霧ぐらいは、とこだわるのも理解していた

だけよう。

といって、私は霧に、身を隠してくれる役を果してくれと期待しているわけではない。ロンドンの霧ならいざ知らず、東京でそうした濃霧の日はまず考えられない。

私はあくまで、雰囲気として、霧が欲しいのである。

それにしても、霧というのは、なかなか出ないものだ。

ナイフを買い込み——もちろん、買う場所などは充分に注意した——毎日、毎日、砥いでいるのに、霧は一向にかかってくれない。

そしてもう二か月が過ぎてしまったのである……。

「いや、珍しいよ！」

と、外回りから戻って来た若い社員が言った。

「どうしたの？」

社の受付の女の子が訊く。もう四時五十分だというので、すっかり帰り支度をしていく。

「霧だよ、霧。凄い霧だ。一寸先も見えないぜ」

「オーバーね」

と女の子のほうは笑っている。

「本当だってば。窓から覗いてみるよ」

「そんなに凄いの？」

と受付の子はさっさと立って見に行った。

これが仕事なら、もっとノロノロ歩いて行くのだろうが。

すぐに戻って来て、

「本当！ 凄いわね」

と、楽しげに言った。

私は、机についていたが、仕事が手につかなかった。——霧？ 霧だって？ ついに来たのか。

待ちに待った日だ。「霧の夜の殺人」——明日の朝刊は、その見出しをいっせに掲げるだろう。

私の胸は高鳴った。ついに時は来たのだ！

私の名は「切り裂きジャック」。いや、まずここは世間一般の通り名を書いておくべきだろう。

私はこの社会では——つまり一九八二年の日本にあっては、ひらたまさや平田正也と呼ばれている。

三十六歳。独身で、父も母もすでに亡くなって、兄弟もなく、一人暮らしをしている。

二枚目とはお世辞にも言えないし、スタイルとて良くはない。しかし元祖のジャックにしても、二枚目だったとは限らないし、スマイルだったという記録もない。

そんな外見上のことより、問題は中身である。私こそは切り裂きジャックの後継者にならねばならない。

あの後も、数々の犯罪者が出た。中には、ジャックを遥かに上回る数の人間を、ずっと残忍な方法で殺した犯人も少なくない。

しかし、私に言わせれば、「霧の夜の殺人」という、正統的なスタイルでの殺人は、まだなされていない。

どの犯罪者も荒っぽく、欲得づくで、そこには雰囲気や詩がない。

〈死〉はあっても、〈詩〉がない、というのは、語呂合せになるが……。

ジャックは別に金を求めたわけではない。彼は女を憎んでいたのだ。

私？ 私も同じだ。若い頃からこの方、女に泣かされ続けて来た。その積もり積もった怒りが、ある日、霧の夜に出没する殺人鬼の絵を見たとき、爆発した。

いや、もちろんそれは内面的な表現である。

私は、一応、表面上は、このK物産という中小企業の社員、平田正也であり、これからもそうありつつけるだろう。

しかし、それは私の仮の人生なのである。私は、その一枚の絵の中へ入り込んで、その主人公になったのだ。

切り裂きジャック。——霧の夜のロンドンに出没して、売春婦を殺し続けた男。し

かも外科医のような手ぎわの良さで、乳房^{ちぶき}をえぐり取ったり、内臓を切り取ったりした。実際、ジャックの正体は気の狂った医者に違いないとも言われた。しかし、ついにジャックは捕まらなかった……。

「おい平田」

だみ声が、私の高揚^{こうよう}した気分^{きぶん}に水をあびせた。課長の山口^{やまぐち}である。いやな予感がした。

「何でしょう」

仕方なく立って行くと、山口は机の上を片付けている。課員の誰かが、五時になる前に机の上を片付けたりすれば、露骨^{ろこつ}に当てこすりを言うくせに。

「今夜、顧問会議がある。それに出てくれ」

顧問会議というのは、もうここを停年でやめた老人たちや、日頃何かと世話になっている人々の、月一回の定例の会議だ。

「私ですか」

「そう言っただろう」

「しかし……」

「何だ？」

「ちょっと……今夜は用がありました」

と私は言った。

「俺もだ」

と山口はニヤリと笑った。「課長の命令だぞ。それをいやだと言うのなら、会社に何の用もないようにしてやろうか」

笑ってはいるが、おどしつけて面白がっているのだ。

私は諦めた。――霧は今夜一杯ぐらい続くだろう。会議はせいぜい九時には終る。

会議と言っても、別に議題があるわけではない。要するに顧問手当を払っているので、形式上、こういう集りを開いているのだ。

中身はほとんど世間話である。

「分りました」

「よし、じゃ頼むぞ。車代なんかは小浜君こはまに任せてある」

私は多少、救われたような気分になった。席へ戻ると、五時の終業のチャイムが鳴った。

一斉に椅子いすや引出しがガタガタと鳴って、底に穴のあいた茶碗ちやわんのように、たちまち人の姿が消えて行く。

山口課長も真先に帰って行った。いつも、

「真先に帰るような奴やつはサラリーマンとして失格だ」